猫と私

桜妃梨華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猫と私

【Nコード】
N9611R

【作者名】
桜妃梨華

【あらすじ】
ある日、突然中身が入れ替わってしまった私、篠原理津。しかも相手は猫。もっと言うなら・・・いえ、これはこの際己の尊厳のためにも今は伏せさせてもらいませう。

○以前短編で投稿したものの長編連載Ｖｅｒ．（短編はそのうち削

除予定）

元の姿に戻ってお家に帰ったと思ったら逆戻り、何だかんだで恋愛に発展、する予定。

1

私は、ベッドに寝っ転がってお気に入りの本をめくっていた。
義母（はは）が彼女の趣味で買い、私も気に入っている本のうちの一つ。
一言で言えば魔方陣の本。
非科学的？ファンタジー？　そんなのどうでもいい。結局は自分が楽しむ為のもの。
義母にとっては趣味であり資料でもある。
義母は素直にその世界を楽しんでいるようだったけれど、私はどちらかというと”完成された”その陣の有様が興味深くて仕方が無い。
そう言えば、義母は　成程、そういう見方もあるね、と言ってくれた。良くも悪くも理解のある人なのだ。

ぱたん

・・・十二時か。
「よし寝る前に語ろう。」
義母は明日休日のはず。
とても寝穢いというか低血圧故に朝が超をいくつ付けても足りないくらいに苦手な義母は、頑張って午前一時には寝るようにしている。
そうすれば寝過して昼過ぎに起きるという事は回避しやすいらしい。それでも”しやすい”なのは、彼女の体質としか。
本を本棚に戻し、部屋を出ようとした、
「・・・え？」

扉を開けたらなんか薄暗くて階段一段分ぐらいの段差があった。

ちょ待っ、ウチの家にこんな段差無いって?!

「っひゃぁっ!?」

更には何かにぶつかった! あったかい・・・いきもの・・・??

「にゃぁぁぁ?!」(私ぃぃぃ?!)

・・・え? な、え、今、何て言った私??

「・・・にゃ?」(・・・何?)

・・・ね、こ?

「にゃぅんっ?!」(猫っ?!)

な、何が起こった!! え、猫化?ファンタジーじゃあるまいし!! 夢かこれは夢か?!

思わず頬を引っ張ろうと伸ばした手に、気付く。

猫の手・・・い、や、まえ、あし?

触ったことは無いが、動物大好き好きな友人に言わしてみればとても触り心地が宜しいらしい、肉球、が。

『猫 、 煩い 』

猫猫猫何で猫、と脳内を猫化のことで一杯にしていると、突如、響いた声・・・、いや、意識？感情？ ・・・意思が一番近いか。
断片的に届いたそれの意味は、猫猫と煩い、というもので。
しかもそれは、目の前の自分から発されたものだと、何故か判ってしまって。

「・・・にゃにゃにゃにゃに・・・？」（・・・入れ替わり・・・？）

何か昔そんなドラマあったなぁ、小説とか漫画とか、創作物の中でも一つのジャンルとして確立してるもんなぁ。

納得してしまってから、漸く把握。 うん落ちつけ私。
状況判断をしよう。 さっき私は義母に語り合いと言う名の夜更かしを唆しに行った・・・、否、行こうとして、私は部屋の扉を開けた。
そしたらあるはずもない段差があった。階段一段分、数値にすると二十センチくらいか？ の。 勿論、よっぽど運動神経の良い人でなければ踏み外すだろう。
義母と、そして身体能力的には彼女よりマシ程度だったらしい実母と違い、父に似たらしい私は運動神経は並の上。 しかし上の上ではない。
盛大に踏み外した。 ただ、無意識に体勢を何とかしようと、後ろに倒れるだろうところを前に倒れ掛かってしまった。
・・・普通に後ろに倒れつつ受け身を取った方がまだマシだったのかな・・・
それでもまあ何とか身体をひねって受け身を取ろうとした。今度

は足が滑った。　それはもう、大きな音が聞こえる程に、ずるっ、と。

　・・・家の中だったし裸足なんだけど・・・いや、裸足でも滑る時は滑るか・・・

　そんでもって滑って何とかしようとしたら滑り込みセーフみたいな体勢になって、おでこを何か　――　これは多分、この、猫　――　にぶつけた。

　気付いたら猫になっていた。

　うん、多分きっと入れ替わりなんだろう。

『いれかわり　・・・？』

　そうそう、何ていうの、中身が入れ替わっちゃってるんだよ私達

『入れ替わり　正しぃ　。　戻る　僕　どうする　？』

　・・・ええと、入れ替わっているのは事実だと肯定してくれたようだ。んでもって、どうすれば戻れるのか聞かれてるっぽい。

　んなもん知らん！

『！！　主様　凄ぃ　賢ぃ　魔道師　。　僕　使ぃ魔　。　主様頼む　！！』

　・・・何か聞き捨てならん言葉があった。それも複数。

あるじさま？　まどうし？　つかいま？　何ソレどこのファンタジー？

よし落ちつけ私。（二回目。）

・・・魔道？　魔法、があるの・・・？

『ある　。　主様　魔法　使う　。　』

肯定されちゃったよオイ。

この猫は　——　薄暗いせいで肉球のみ浮かび上がって見えたので、何色のというかどんな種類か把握できていない　——　”主様”とやらにかなり心酔しちゃってるらしい。　まぁ”使い魔”らしいから当然か。　・・・当然なのか？

・・・ってか、どーやってその”主様”に助けを求めるの？

『？？　』

質問の意味がわからんって顔だな。

つまりは猫君、君私の身体で喋れるのかという事だ。

「・・・んみ？」

私の口から洩れたのは、明らかに人間らしくない一言。

無理ぽ。

・・・こうなったらぁ・・・

「ティナル？どこだ？」

のぁぁぁ！？

「ああ、そこにいたのか・・・うん？」

男の人。柔らかいテノールの声。姿はよく見えない。だって薄暗いし猫視線だし。微かに、男の着ているとっても長いらしい服の裾らしきものが見えた。

「・・・何者だ？」

はい、多分きっと恐らく異世界人だと思われます。

『異世界　・・・？　』

あ、猫君が反応した。

「・・・喋れないのか？」
「・・・みぃー」

あ、こら。

「・・・・・・・・」

何とも言えない空気が漂った後、男は溜息をつき何事か言った。

「みぁ！！」

その言葉を残し私の姿が消える。・・・え？

「さぁ行こうかティナル」
「にゃうっ！？」

突然抱きあげられ初めて男の格好が見えた。
・・・ローブだな、これ。たぶん。白を基調とした、灰蒼や若草っぽい色が所々に修飾された、何かかっこいいというか如何にも魔道師って格好だ。

「これくらいで驚くなんて珍しいな・・・」

にしても、あの少女・・・

ぶつぶつと抱きあげた私・・・というか猫をそのままに歩き出す男。ちょっと不安定だけれど落としはしないだろうという信頼感はある。　これは猫君の感情かね。

（・・・ってゆーかどうしよう）

そもそもここはどこなんだああ猫君、君はどこへ行った！！？

落ち着け落ち着けーと唱えながら、状況把握を努めることに専念することにした。

2

酷く混乱しながら、段々明るくなってくる視界に目を細める（気分）。　・・・そう言えば猫って夜目利くんじゃなかったっけ？

さっきは何気なく異世界と断定したけども、それは確かなのか。だけどこういうのってお約束な展開過ぎるような気も・・・

『りっちゃん、何事も経験だって』

にっこりほわほわと笑う義母の顔が思い浮かび、思わず内心で溜め息。

そうでしたね紗紀さん。

やたら子供の頃から大人びていた私に、義母はそう言ってあちこち連れ回し様々な経験をさせてくれた。自分のこととなると異常なまでに面倒くさがりになる癖に。

おかげで私は器用貧乏ということがわかった。つまり、大抵のことは難なく出来るが中々上達せず、最終的に三日坊主になる。前半は兎も角、後半は義母と同じ。　ただ、私はそれっきりになることが多いけど義母は一ヵ月後とか半年後とか、時間を空けてから再び始めることがあった。ちなみに義母はやたら凝り性の手先が中途半端に器用な人である。

そんな義母は、日本列島を九つに分けた場合の地区内でそこそこ有名な国立教育大を卒業後三年間の講師生活を経て教師になるかと思えば何故か念願の司書になった。　いや、念願なので不思議ではないと言えばその通りなのだが、せっかく教師（しかも母校で）になれたのに彼女は敢えて司書の道を選んだのだ。まあそれでも就職

先は学校図書館のほうだったけども。
　そんな彼女の読書の趣味は主にファンタジー。自分でも創作するくらいには大好きで、私もよく読ませてもらったりした。
　ドリームだの二次創作だのトリップだのＳＦだのベーコンレタスだの萌えだのツンデレだのポニテだの、夜な夜な（というか夜に限らず）語り尽くしたものである。

　それに、身の回りに完全に趣味が一致する友人がいないとのことで（少しずつしか一致しないらしい）、私は義母の良い話し相手だった。あまり自分から語る方ではない　――　というか、基本口下手な　――　義母は、私に対してだけはよく喋る。ただ単に私が聞いているようで聞き流しているところがあるのも確かだけど。
　そんな義母と人生の半分以上を過ごし、おかげで妙にマニアっぽい知識も身についちゃったりしているが、まぁそんな語り合いのおかげで今現在、割と冷静になれていると言える。

　絶対、夢にしろ紗紀さんに教えてあげたら喜ぶもんなぁ・・・

　可能な限り、覚えておこう。と、主様、の腕の中から、だいぶ物が見えるようになった視界を見渡す。
　どうやら石造りの建物のようで、所々灰色の石壁が剥き出し。タペストリーとか、そういうもので覆われていて、イメージとしては洋風のお城の中って感じ。床にはたぶん、絨緞。しかも赤い。

　何かお金持ちっぽい感じ。・・・偏見かなぁ

　がちゃ

　身体を支えていた腕が片方離れ、扉が開かれた。・・・わぁ、

ここも床がまっかっか。
「さて、ティナル。　もうすぐ食事の時間だから、少し待っていなさい」
「にゃぁ」
返事をすると、くすりと笑う気配がして、床におろされる。　ひらひらしていてついつい追いたくなる白いローブの端を、衝動を堪えながら目で追った。
男は部屋を出て行き、扉が閉まった。はぁ、と息を吐く。

・・・どうしよう・・・

とにかく、元に戻る方法。そして、帰る方法。　・・・夢で寝て目覚めたりとか、しないかなぁ
そうだったらいいのにな、といつかの童謡のフレーズが浮かび、現実逃避してる場合じゃないぞ自分、と内心叱咤する。
取り敢えず、おろされた位置から動いてうろうろしてみた。部屋自体はそんなに広くない、と思うけど、猫の姿だからか何だか広そう、な気がする。
部屋の様子は至ってシンプルで、よく見れば淡く赤・橙・黄系の明るい色が白とのストライプになっている壁紙、扉に背を向けて立って、左右の壁際にはオフホワイトの三人ぐらい座れそうなソファが一つずつ。正面には大きな窓が一つあって、今はどうやら夜らしい。閉められたカーテンの隙間から、明らかに昼間でない様子が見て取れる。　そして、部屋の中央には大きな丸テーブル。

・・・食事するための部屋・・・・とか？

まさかな、と思いつつ更にうろうろ、うろうろ。
そしたら、ノックもなしに突然扉が開いた。

2（後書き）

余談：学校図書館（小中高、大学等に付属している図書館）と、公・私立図書館（国立や市立、私営（確かあったはず・・・↑）の図書館）とでは必要な司書資格が違っています。ちゃんと知ってます。知ったのはここ数年の割と俄か知識ですが。

なんとなく誤解を受けるかなと思ったので余談。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9611r/

猫と私

2011年4月2日11時55分発行